



メディア分析からみる女性の野球進出

久保田, 帆香

(Citation)

日本文化論年報, 28:39*-90*

(Issue Date)

2025-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100495751>



メディア分析からみる女性の野球進出

久保田 帆 香

はじめに

近年、スポーツにおける女性の進出が進んできている一方で、ジェンダー問題は多く残っている。東京 2020 オリンピック¹では、女子選手参加割合が約 48%（パラリンピックでは約 42%）で、大会史上最高であったという²。1896 年の第 1 回大会から 125 年が経ち、ようやく男女比がほぼ同等となった。「ジェンダー平等」は容易でないことがよくわかる。

ジェンダー学、特に男性学の研究で知られる伊藤公雄は、「スポーツ領域は、男女の生物学的・身体的性差にきわめて敏感だったため、男女の壁は根強く維持され続けてきた³」と述べている。各競技において、男女間で競技人口や人気に差があることは想像に難くない。なかでも、日本の野球の男女差は非常に大きいと言える。WBSC 女子野球ワールドカップにおいて、日本代表（マドンナジャパン）は現在 6 連覇中であり、世界に誇る強さを持っているが、メディアに取り上げられることはほとんどない。男性がプレーするプロ野球や高校野球と比べれば天地の差である。

一方で、近年、女性の野球競技人口が増加していたり、選手にとって長年の悲願だった、阪神甲子園球場で試合を行えるようになったり、女子野球が発展しつつあることも事実である。

そこで本稿では、野球における女性との関係がどのように変化してきたかを分析する。男のスポーツとみなされやすい野球において、女性（今回は女

1 東京 2020 オリンピック競技大会。2021 年に開催。

2 公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会「東京 2020 大会の「多様性と調和」におけるジェンダー平等報告書」(<https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/special/watching/tokyo2020/games/unity-in-diversity/>、最終閲覧日：2024 年 1 月 7 日)、p.4。

3 伊藤公雄「変容する現代スポーツと男性性」『スポーツ社会学研究』27(2)、2019、p.7。

性選手に焦点を絞る。)はどのように捉えられ、受け入れられてきたのか。女子野球の発展は、野球のジェンダー・バイアスの越境に繋がるのかを考察したい。

第1章 スポーツ・ジェンダー学と女子野球の歴史

本章では、スポーツ・ジェンダー学の概要と学問的な重要性について解説したあと、本論のテーマである女子野球の歴史を概説することによって、第2章での新聞記事の分析、第3章で論じる女子野球を題材にしたマンガ作品を考察する際の基盤としたい。はじめにジェンダーの諸概念やスポーツ・ジェンダー学についてまとめ、第2、3節では、スポーツとジェンダーについて詳しく説明する。第4、5節では、女子野球に注目する理由と、女子野球に関する先行研究を振り返るとともに、その歴史をまとめる。

第1節 ジェンダーの諸概念／スポーツ・ジェンダー学とは

スポーツ・ジェンダー学について解説する前に、ジェンダーについてまとめておこう。

ジェンダーに関連して「性」というニュアンスを持つ言葉に、「セックス(sex)」と「セクシュアリティ(sexuality)」がある。

まず、「ジェンダー(gender)」とは、「女や男に付与された特性、行動に文化的につくられた集団⁴。」とされている。このジェンダーの概念は、アメリカの人類学者で、ジェンダー論に大きな影響を与えたマーガレット・ミード(Mead, Margaret 1901～1978)によって発見された。彼女は「男性性」と「女性性」が生物学的にでなく文化的に決定されることを主張し⁵、対する「セックス」は生物学的なものであると区別する見解を示した。

一方で、アメリカのジェンダー・アイデンティティについての理論家であるジュディス・バトラー(Butler, Judith 1956～)は、セックスは生物学

4 ハム、マギー(木本喜美子・高橋準監訳)『フェミニズム理論辞典』明石書店、1999年、p.122。

5 同上、p.190

的で自然な性差ではなく、ジェンダーと同様に社会的に構築されたものだと主張している⁶。

そして「セクシュアリティ」もまた、「社会的構築物」として位置づけられる。フェミニズムでは、「セクシュアリティは生得的なものではないが、個人の生活や意識のあり方に影響する政治的・文化的制度を反映している⁷」とされている。

最近では、セックス、セクシュアリティともに、自然なものではなく人為的なものであるという論考のもと、「性はすべて社会的・文化的構築物としてのジェンダーである」という見方が優勢になっているという。現実社会における「性の多様性⁸」が、この理論を補強している⁹。

しかし、近代スポーツは、「男女、二つのカテゴリーだけを生物学的事実のように認め、男／女という対立した性を捏造して」おり、「近代スポーツにおける男性の優位性、ジェンダーの階層性を堅持」してきた¹⁰。スポーツは男女二項対立を容認しやすく、ジェンダーにもとづく差別や不平等が発生しやすいのである。

そして、スポーツ史やスポーツとジェンダーを専門とする来田享子によれば、「私領域における個人の自由や権利、身体を基盤にした平等と公平の問題を考えるために、スポーツは重要な手がかりを提供するフィールド」だと考えられるとし、このようなフィールドを対象とするのがスポーツ・ジェンダー学だと述べている。そして、スポーツ・ジェンダー学は、「スポーツ科学とジェンダー学の双方にインパクトを与えると同時に、スポーツを通じ、社会をより良く変化させる学問」だと位置づけている¹¹。

6 バトラー、ジュディス（竹村和子訳）『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999年、pp.28-29。

7 同上。

8 例えば、LGBTやトランスジェンダーなど、セクシュアル・マイノリティと呼ばれる人々の存在。

9 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、pp.12-13。

10 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、p.18。

11 来田享子「スポーツ・ジェンダー学の展望：研究成果を社会に活かす」『スポーツとジェンダー研究』20、2022、p.48

第2節 男性中心のスポーツ発展

この節では、スポーツの定義について確認し、スポーツの発展の歴史をジェンダー的な観点を交えて概観する。

スポーツ (sport) とは、広辞苑によれば「陸上競技・野球・テニス・水泳・ボートレースなどから登山・狩猟などにいたるまで、遊戯・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動の総称。¹²⁾」と定義されている。スポーツ社会学、スポーツ・ジェンダー学を研究する飯田貴子によれば、スポーツには広義と狭義の両解釈があるとしており、広辞苑の定義は広義に捉える場合のものだ。一方、狭義に捉える場合は「近代スポーツ」(国際的に統一されたルールを持ち、組織化された競技スポーツ)を指し、一般には「スポーツ」と言えば「近代スポーツ」を指すことが多い。ジェンダーの生産・再生産装置として議論になる際に指すのは「近代スポーツ」である¹³⁾。本論文においても、「スポーツ」は「近代スポーツ」を指すものとする。

では近代スポーツとは何か。もう少し溯って「スポーツ」を捉えてみる。英語の「sport」は19世紀から20世紀にかけて一般化した言葉とされており、その由来はラテン語の「deportare」であるという。この「deportare」は「運び去る、運搬する」という意味であったが、後に転じて精神的な次元における移動や転換、「義務からの気分転換、元気の回復」、すなわち仕事や家事といった「日々の生活から離れる」気晴らしや遊び、楽しみ、休養といった要素を指すようになった¹⁴⁾。

このように、スポーツは第一義的には「遊び」の要素が含まれていたが、近代以降のスポーツは、共通のルールの下での競争や、数量化した結果を求めるようになっていった。近代以前にもルールが存在していたが、それは民

12 広辞苑第六版、「スポーツ」、<https://sakura-paris.org/dict/%E5%BA%83%E8%BE%9E%E8%8B%91/prefix/%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%84>、(最終閲覧日：2024年1月15日)

13 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、p.14。

14 スポーツ庁「スポーツ庁が考える「スポーツとは? Deportareの意味すること」DEPORTARE、<https://sports.go.jp/special/policy/meaning-of-sport-and-deportare.html> 2018年配信 (最終閲覧日：2023年11月5日)。

族や地域によって異なるものだった。民族や地域固有のルールを競技ごとに統一するようになり、近代スポーツとして発展し、概念が確立してきた。

その成立の中心的舞台は近代のイギリス、なかでもパブリック・スクールなどの学校教育機関である。チーム競技などを通じて各々の責任感を養い、健やかな身体を育み、フェアプレイの精神、およびその人格化であるスポーツマンシップを身につけていく、という一種の道德教育として扱われた。しかし、この時代に学校へ通って教育を受け、スポーツを行うことができたのは男性のみであった¹⁵。つまり、スポーツは当初より、男性のみを前提にした文化として成立し発展してきたのである。

明治時代初期、日本に“輸入”されたスポーツも同様に、「遊び」ではなく「身体を鍛える」ことや、「体育」すなわち人材育成のためのものとして浸透し、成長した。さらに、日本古来のストイックな武士道精神、身体活動を通して精神を磨くという伝統が、スポーツに「遊び」の要素を加える余地を与えなかった¹⁶。スポーツメディア論やスポーツ史を研究する佐野慎輔は、こうした明治のスポーツ浸透を「今日のスポーツの“不幸”が始まったように思う」¹⁷と評価している。日本においても、スポーツは男性的原理として取り入れられ、女性規範に合致しないものとして確立してしまった。

以上のように、近代以降、スポーツは「遊び」の要素を含めず男性中心的に発展してきたのである。

第3節 スポーツにおけるジェンダー・バイアスとメディア表象

第2節でみたように、スポーツは男女の差を際立たせる装置として利用され、男性のみを前提としてきた歴史がある。時代が進むにつれ、女性の社会進出が促進され理解されるようになってきているものの、スポーツ界における性差やジェンダー問題は未だ多く残っている。

15 井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論 [改訂版]』ミネルヴァ書房、2020年、p.52。

16 佐野慎輔「スポーツとは何か」（笹川スポーツ財団ホームページ、<https://www.ssf.or.jp/knowledge/history/sports/01.html>、2018年配信）（最終閲覧日：2023年11月5日）。

17 同上。

そのひとつには、私たちが日常的に抱くスポーツ競技のジェンダーイメージが挙げられる。例えば、ボクシングや柔道などに代表される、激しい肉体接触を伴う「格闘技系」のスポーツは「男らしさ」を表現し、男性に適しているとみなす。反対に、新体操やフィギュアスケートに代表される「表現系」のスポーツは「女らしさ」を表し、女性にふさわしいとみなす傾向にある。男性は「活動的、攻撃的でなければならない」、あるいは、女性は「か弱く、繊細で、美しい」という、伝統的なジェンダー役割観に基づき、スポーツにおいてもそれが期待されているのである¹⁸。

さらに、こうしたジェンダー・バイアスは、メディアがスポーツを報じる過程で再生産されていく。スポーツとメディアにおけるジェンダー問題としてよく指摘されるのは、女性アスリートが報道される際の「女らしさ」の強調と、メディアに潜む「男のまなざし」である。

女性アスリートが映像や記事で描かれる際、スポーツを越えた「女性」の物語が提示されやすい。競技活動と家事・子育てとの両立、父親的存在であるコーチとの厚い信頼関係、魅力的な笑顔やプロモーションといった物語によって、「アスリート」の姿だけでなく、「母」や「妻」、「娘」、「女の子」、「アイドル」といった姿が付与される。それをステレオタイプ化し、「望ましい」女性アスリートのイメージが構築されていく¹⁹。

また、メディアには「男のまなざし」が潜んでいると言われる。これは、週刊誌やスポーツ新聞などで「美女アスリート」なる特集が組まれるなど、女性アスリートの競技能力よりも容姿や外見、ライフスタイルばかりに関心が向けられ、メディアの眼差しが「男性的」である事実を表している。これに対し、メディア／コミュニケーション論を専門とする阿部潔は、「男のまなざし」が男性のみによって構築されているとは考えていない。「『自分もあのようになりたい』と願う同一化の対象としてカワイイ／キレイな選手たちに魅力と憧れを抱く女性の読者／視聴者たちは、なかば無意識のうちにメディアの『男性の眼差し』との間に共謀関係を結んでしまっている²⁰」とし、

18 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、p.104。

19 井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論 [改訂版]』ミネルヴァ書房、2020年、p.56。

20 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年、p.106。

女性も「男のまなざし」を受け入れてしまっていることを指摘する。

メディア表象においては、時としてスポーツ以外の要素がスポーツ以上に大きな意味を持ち、スポーツにおけるジェンダー観に影響を及ぼしているのだ。

第4節 ジェンダー・バイアスの強い野球

日本において、数ある競技の中でも、広く人気を誇っているのが野球である。しかし長い間、野球は男性が行うものとして考えられてきた。

第二次世界大戦後の野球を「男性性」の視点から問い直した山口＝内田によれば、戦後の野球は「男文化」を象徴的にみせたという。日本が敗戦したことによって、「国家のために死ぬ」という「男の証」や、拠り所である「強い国家」が消失し、「男らしさ」「男の連携と優越」が脅かされた。「男性性」の再定義装置が必要とされ、そこで野球が求心力を有した。さらに、メディアによって「たくましく」「不屈の」「正しい」野球選手のモデルが提示されたことに加え、国家の教育方針に合致したことで、女性を排除した男性のための野球が浸透していった、と述べている²¹。

今日でも、野球と言えば男性がイメージされやすく、女性が行う野球（以下、女子野球）の人気や認知度には大きな差がある。男女間の競技人口の差、メディアでの取り上げられ方が、そのことを如実に示している。

笹川スポーツ財団が2022年に行った調査によれば、20歳以上の野球人口（実施人口）は男性229万人、女性27万人であった²²。（図1）たしかに、男性の競技人口が減少傾向である一方で、女性の競技人口は増加しており、差は縮まりつつある。しかし、野球以外に、日本でメジャーなスポーツであるサッカー（図2）、バスケットボール（図3）、バレーボール（図4）などと比べてみれば、野球の男女間の開きは一際大きいことがわかる。

21 山口＝内田雅克「ジェンダー史研究：第二次世界大戦後の「野球」と日本人男性の「男性性」」『東北芸術工科大学紀要』22、2015、pp.154-162。

22 笹川スポーツ財団「野球人口」https://www.ssfor.jp/thinktank/sports_life/data/baseball_0018.html、（最終閲覧日：2023年12月28日）

図 1 日本における野球人口の推移（年 1 回以上の実施率）

（笹川スポーツ財団「野球人口」https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/baseball_0018.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 9 日））

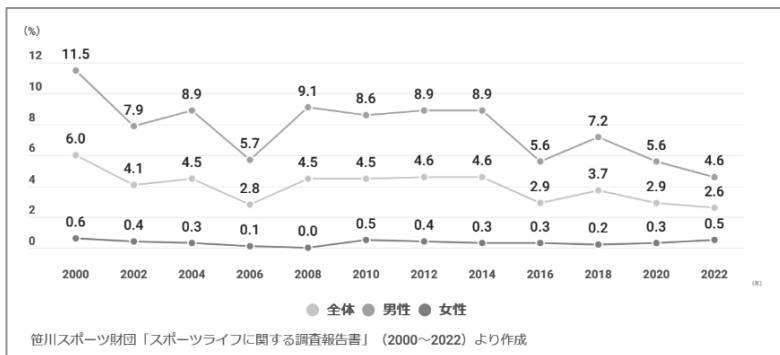


図 2 日本におけるサッカー人口の推移（年 1 回以上の実施率）

（笹川スポーツ財団「サッカー人口」https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/soccer_0018.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 9 日））

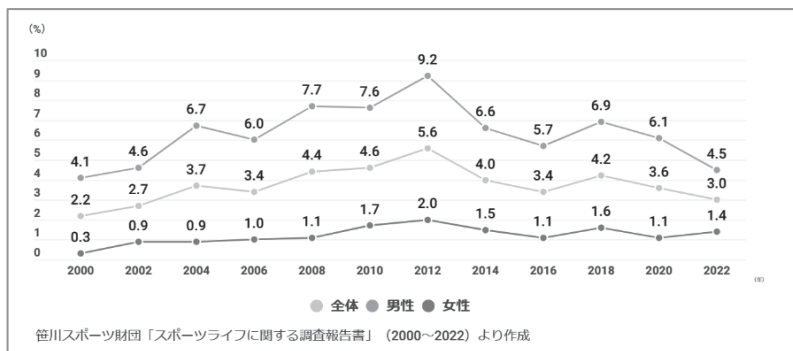


図 3 日本におけるバスケットボール人口の推移（年 1 回以上の実施率）
 （笹川スポーツ財団「バスケットボール人口」https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/basketball_0018.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 9 日））

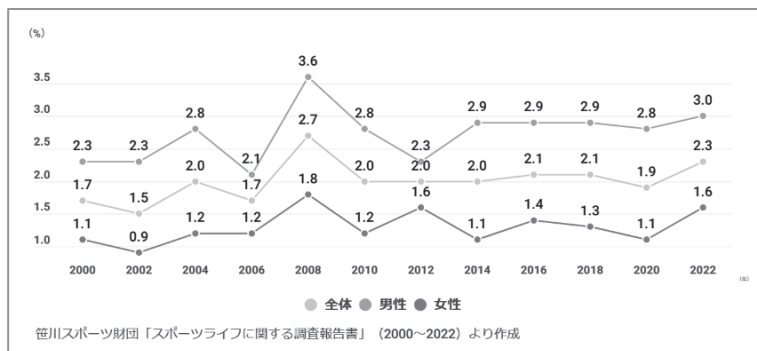
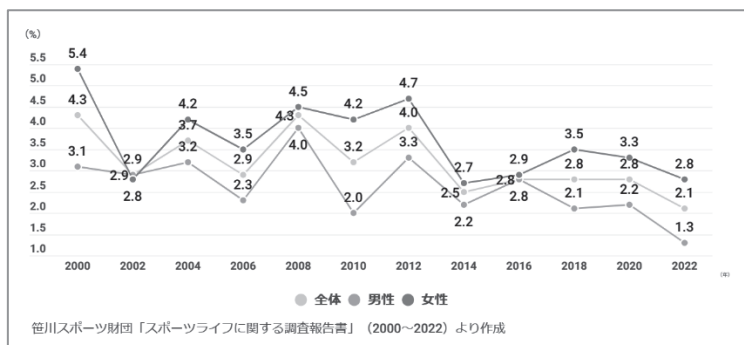


図 4 日本におけるバレーボール人口の推移（年 1 回以上の実施率）
 （笹川スポーツ財団「バレーボール人口」https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/data/volleyball_0018.html（最終閲覧日：2024 年 1 月 9 日））



また、女子野球がメディアで取り上げられることは非常に少ない。その指標の 1 つとして、新聞記事を確認してみよう。朝日新聞社のオンライン記事データベース「朝日新聞クロスサーチ」にて 1985 年以降の記事の検索をし

てみると、検索結果は「プロ野球」が138,076件、「高校野球」が215,488件であるのに対し、「女子野球」は1,225件であった（いずれも2023年11月7日時点での検索ヒット件数）。また、毎日新聞社のデータベース毎索で検索してみても、「プロ野球」が200,352件、「高校野球」が226,286件、対して「女子野球」は981件である（2023年11月7日時点での検索ヒット件数。1972年以降の記事が対象）。どちらも、見出しや本文に検索ワードが含まれていれば1件にカウントされるため、内容が野球中心でない記事も含まれる。そのため、あくまで参考程度の指標ではあるが、主に男性が行う野球を指す「プロ野球」「高校野球」と、「女子野球」の報道量、注目度合いには、圧倒的な差があると言って差し支えないだろう。

以上のように、日本では、野球というスポーツ自体は人気が高く、野球が受け入れられる土壌がある一方で、野球をする女性や女子野球を見る人は少ない。他競技に比べて、「野球＝男性」のイメージが強く、またそのイメージが覆されにくい状況にあり、女子野球はいまだマイナースポーツである。

第5節 女子野球の歴史と現状

前節で女子野球はマイナースポーツであると述べたものの、競技人口は増加傾向にあるなど、近年の発展は目覚ましい。ここで、日本の女子野球の歴史と現状についてまとめておく。表1は、女子野球を軟式野球、硬式野球、プロ野球に大別し、筆者が年表として作成したものである。女子野球の盛衰を理解するのに重要と思われる出来事を中心に記載した。

1910年頃から女学校にも野球部ができるが、長続きはしていなかった²³。戦前の女子野球の普及と衰退についてまとめた論文に、高嶋航の「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」がある。フィリピン、中国、日本における女子野球の展開をまとめ、各地で異なる展開をした理由の1つにジェンダーを挙げている。日本では、野球と男性性が強く結びついていることに加えて、上（政府）からの方針ではなく下（学校）からの実践によっ

23 さらに古い記録として、明治30年代の高等小学校の卒業記念画帳に、「女子野球」の数コマが描かれているのが見つかるようである。（「明治の「女子野球」」『朝日新聞』1985年8月18日、朝刊、p.23。）

て広まったために、女子野球が不安定な基盤のもとで発展し、男性性と結び付けられる危険性が常にあったという²⁴。

戦後は「ロマンス・ブルーバード」を皮切りに、女子プロ野球チームが複数設立されるも、物珍しさや話題性だけではすぐ飽きられてしまい、わずか2年で「プロ」としての活動が休止した。経営基盤の脆弱さ、野球そのものの実力が低かったことなども要因であったようだ。スポンサー企業に経済支援を頼る社会人野球、いわゆる「ノンプロ」に移行して20年ほど生き延びたが、1971年に女子社会人（企業）野球チームである「サロンパス」が解散したことにより、ノンプロの女子野球は自然消滅の状態となった²⁵。

その後、軟式野球において全国大会の開催が始まるなど、女子野球の普及に動きが見られるなか、1991年にはついに、野球協約の第83条内の2つの条項が撤廃された。すなわち、「医学上男子でないものを認めない」という条項の撤廃により、女性にもプロ野球（NPB²⁶）の門戸が開かれたのである。すぐに2人の女性がプロ球団の入団テストに挑戦し、結果は不合格であったが²⁷、野球の歴史においては重要な出来事であることには違いない。一方で、女子選手は未だ誕生したことはない。女子プロ野球は2010年に復活したが、2021年に再び、事実上の消滅となっている²⁸。

学生やノンプロにおける女子硬式野球は2000年代に大きく発展しており、WBSC女子ワールドカップでは現在6連覇中、2024年大会では7連覇が期待されている。また、2020年から数年の間に、NPBの球団から女子のクラブチームが相次いで発足していたり、全国高校女子硬式選手権大会では、

24 高嶋航「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」『京都大學文學部研究紀要』58、2019、pp.165-207.

25 八木久仁子「昭和の女子野球：その興亡の要因」『人間健康研究科論集』1、2018、pp.29-49.

26 一般社団法人日本野球機構。セントラル・リーグ、パシフィック・リーグを統括する。

27 「森井和美さんと則淳子さん「プロ野球に挑戦」」『朝日新聞』1991年10月23日、夕刊、p.5。

28 スポーツ報知「女子プロ野球が事実上の消滅、登録選手がゼロに」<https://hochi.news/articles/20210722-OHT1T51107.html?page=1>（2021年7月22日配信）（最終閲覧日：2023年12月30日）

2021 年から決勝戦の会場が阪神甲子園球場となったり、女性が野球をする環境を少しずつ整える動きがある。女子野球は何度も盛衰を繰り返しており、現在も発展途上と言えるだろう。

表 1 女子野球の歴史（筆者作成）

年	軟式野球	硬式野球	プロ野球
1915	夏の中等野球（現高校野球）大会が始まった年。 各地の女学校にも野球部ができるが長続きせず。		
1924	「第1回日本女子オリンピック大会」陸上競技や水泳、硬式庭球に交ざって 野球なども種目の1つとして行われる。		
1938		カリフォルニア州女子軟式野球団が来日、 各地で親善試合。	
1949			「ロマンズ・ブルーバード」結成。
1950			「ロマンズ・ブルーバード」「レッドソックス」「ホーマー」「パールズ」の4球団で 日本女子野球連盟を結成。 →最盛期には全国に約25チーム
1952			社会人野球（ノンプロ）に移行。
1959			日本女子野球連盟を解散、 日本女子野球協会が発足。
1971			「サロンパス」が解散。 →社会人（ノンプロ）女子野球自然消滅
1977			全日本女子野球協会設立。
1982			全日本女子野球協会、自然消滅。
1987	全国大学女子軟式野球連盟を結成。 第1回全国大会		
1990	全日本女子軟式野球連盟を結成。 第1回全国大会		
1991			・野球協約第83条のうちの2つの条文が撤廃 →女性にも門戸が開かれる。 ・プロ球団オリックスの入団テストに2人の 女性が挑戦（不合格）。
1994	全日本軟式野球連盟が小・中・高・一般女子 の参加を承認。	東京六大学が女子学生に門戸を解放。	
1995			アメリカ女子プロ野球チーム「シルバーク レッズ」の入団テストに3名挑戦（不 合格）。
1997		神村学園（鹿児島）全国発の女子硬式野球 部設立。	
1998		全国高校女子硬式野球連盟が発足。	
1999		全日本硬式チーム「エネルゲン」が渡米。	
2001		東京六大学リーグ戦で、明大vs東大で初の 女性投手対決。	
2003	第1回全国高等学校女子軟式野球選手権大会 を開催。		
2010			女子プロ野球開幕。
2014	全日本女子軟式野球連盟が公益財団法人全 日本軟式野球連盟に加盟。	宮崎県で第6回IBAF女子野球ワールドカップ が開催。	
2018		第8回WBSC 女子ワールドカップにおいて日 本が優勝、6連覇達成。	
2020		クラブチーム「埼玉西武ライオンズ・レ ディース」を発足。（日本野球機構 （NPB）の12球団で初めて）	
2021		・クラブチーム「阪神タイガース Womaen」が発足。 ・全国高校女子硬式選手権大会の決勝が甲 子園で開催。	事実上の消滅。
2022		全国高校女子硬式選抜大会の決勝が東京 ドームに。	

第2章 新聞記事における野球と女性の関係

前章では、スポーツ、特に野球は、男性中心で誕生・発展してきたことを確認した。そんな野球の世界に、女性はどのように受け入れられてきたのか。本章では、新聞記事における女子野球や、女性選手の報道を分析する。新聞報道と社会意識との間には、部分的であれ、関連ないし類似性が生じているとされている²⁹。ゆえに、新聞記事を分析することにより、各時代の大衆が女子野球や女性と野球の関係に関して、どのように捉えてきたかが見いだせると考える。

今回は、主に朝日新聞社のオンライン記事データベース「朝日新聞クロスサーチ」を利用した。1879年（明治12年）の創刊号から、朝日新聞デジタル、雑誌「AERA」「週刊朝日」の記事も収録されており、「朝日新聞1985～、週刊朝日・AERA 全文記事データベース」、および「朝日新聞縮刷版 昭和戦後紙面データベース（1945～1989）」に含まれる全ての記事を対象とする。

第1節 戦前（～1940年）の女子野球の記事

第1章でみたように、伝統的なジェンダー役割観により野球は男性がするものとみなされ、女性が野球をすることは奨励されてこなかった。戦前（1925～1940年代）の記事で「女子野球」を調べてみても、出てくるのは23件ほどであり、日本人女性による野球についての内容は無い。見つかったのは、1925年と1938年に、アメリカから女子野球団が来日したこと報じる記事のみ。そこから、日本では女子野球に対して良いイメージが持たれていないことや、特異な存在として見ていたことがうかがえる。

典型的なのは、1925年に来日した女子野球選手の姿が写真とともに掲載された記事である。そこでは女子選手の容姿に関する内容が大半を占めていた。

何れも若々し「原文ママ」い快活らしいスポーツな格好をして靴のかか

29 樋口耕一「現代における全国紙の内容分析の有効性：社会意識の探索はどこまで可能か」『行動計量学』38（1）、2011、pp.1-12.

との高いのを穿いてるものなど一人も居ない、その中に花形の遊撃を承るホートン嬢は當年十二歳の可愛らしい茶目だ、一番の年増さんはオガラというて二十五歳だといふ、大して大女も居ないが左利投手のカーンス嬢はスラリとやせては居るが六尺もあらう

(「六尺もある女投手 十二歳の可愛い遊撃嬢 快活らしい姿をそろへて初お目見得の女子野球団入京す」『朝日新聞』1925年10月20日、東京夕刊、p.2。)

「若々し」という文字が視覚的に強調され、年齢や身体面についても詳細に伝えられている。また、「可愛らしい茶目」な遊撃「嬢」と女性性を表現する一方で、「スポーツな格好」でヒールのある靴を履いていないことにも注目されており、女性がスポーティな服装をして、スポーツをすることが当たり前でなかったことがよくわかる。

さらに、彼女たちがユニホーム姿で早稲田大学と慶応大学の試合を観戦したことが、翌日の新聞で伝えられる。そこでも、彼女たちの様子を「花恥づかしい女だてらに野球帽ユニフォーム姿雄々しい青眼娘連中バット片手に例の米國女子野球團の一行³⁰」と、やや批判的な表現がされている。また、その場に居合わせた観客も、女子野球団の一行に差別的な言葉を浴びせている。

「つまらねえ者をグラウンドに入れるな、ベラボーめ、今日は大切な早慶戦ぢやねえか」と大聲しつ呼されて一行一壘側のスタンドへドタドタ³¹すわり込んで

(「ユニホーム姿で早慶戦見物 青眼娘子軍に満場の観衆総立ち」『朝日新聞』1925年10月21日、東京朝刊、p.7。)

その後、アメリカの女子野球団は、日本人男性の野球チームと数試合対戦

30 「ユニホーム姿で早慶戦見物 青眼娘子軍に満場の観衆総立ち」『朝日新聞』1925年10月21日東京朝刊、p.7。

31 原文は2回目の「ドタ」は「くりかへし符号」の「くの字点」で表記されているが、横書きで表記が難しいため、「ドタドタ」と表記した。

し、どれも敗北を喫している。「女らしくも加勢を頼んで³²」と、男性コーチが助け立ちした場面があったことや、「花形の遊撃手ホートンさんが二塁へスライドして左足をくちき痛がつて泣き出すなど氣勢甚だ揚がらず³³」と、女性のか弱さが取り上げられている。

1938年に来日した女子野球団は、正確にはソフトボール³⁴の選手だったようだ。当時日本ではまだ馴染みがなく、野球とソフトボールがはっきりと差別化されずに表記されている。この来日で問題となったのが、彼女たちのユニホームパンツだった。「警視廳保安部ではユニホームのパンツが余りに短すぎるのに吃驚³⁵」したと報じられ、「パンツ問題」として話題になる。これが契機となってか、アメリカの女子野球団への批判の声も表に出るようになってくる。読者の投書欄である「鉄箒」には次のような投稿がなされていた。

実際白粉をつけて、なまめかしい姿で野球をやつてゐるのを見ると、鼻下長連中の好奇心をそそる見世物としか思へぬ。[中略]

若し日本人の多数が私と同じく女野球をショウカサーカス類似だと考へてくれれば、害毒は比較的少ないのである。處が、お役人などがこれに多少関係を持つと立派な女子スポーツ團のやうに誤認される危険があり、従つて我國の若い女性達に悪い影響を与へる。[中略]

今にして日本婦人の米國化を防止しなければ、わが國古來の美しい婦徳は消えてしまふであろう。

(「鉄箒／女野球団」『朝日新聞』1938年10月11日、東京朝刊、p.3。)

女子野球が普及していないなか、アメリカの女子野球団が見世物的に来日しプレーしたことにより、日本において女子野球は、受け入れ難いイメージに

32 「女らしくも加勢を頼んで 米國娘子軍の初出陣 幸先わるい六A対零」『朝日新聞』1925年10月24日、東京朝刊、p.7。

33 「青鉛筆」『朝日新聞』1925年10月26日、東京朝刊、p.7。

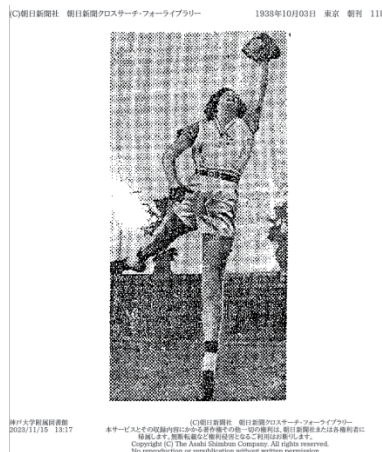
34 当時の記事には「大型軟式野球」と表現されている場合もある。

35 「女野球に牽制球」『朝日新聞』1938年10月5日、東京夕刊、p.2。

なってしまったと推測できる。

このように、戦前の新聞記事には日本人女性の野球に関する記事は見当たらず、アメリカから来日した女子野球団の報道がいくつかあるのみであった。その報道も、女子野球そのものへの注目よりも、アメリカから来日してきたという物珍しさから記事に取り上げられた側面があるだろう。また、記事の内容については、女性の容姿や女性性が強調されており、肝心の野球に関しては、「女に野球は向かない」こと示すような伝え方や、興行的に行われる女子野球に対する批判的な評価が目立っていた。

図 5 短いパンツのユニホームを着て、華麗にボールをキャッチする女子選手（「女野球」の歓迎プロ決まる 松竹チームから早くも挑戦）『朝日新聞』1938年10月3日、東京朝刊、p.11。）



第2節 戦後～1970年代の女子野球の記事

日本は敗戦後、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）の統治のもと、あらゆる面で民主化が推し進められた。その改革のうちの1つ、「女性解放」が進むなか、女性がスポーツに取り組むことも増えてくる。一方で、女子野球に対しては賛否両論があったと言えよう。小説家の平林たい子は、新聞の寄稿の中で、見世物的に行われる女子野球に疑問を呈している。

一歩理性に立ちかえって考えてみると、私はやっぱり女子野球を“肯定”するわけにはゆかなかった。技術的にはほとんど中等野球にも劣るチームが、男子のプロ野球以上の観客以上の観客をあつめて、こうして堂々と関行してられるいわれは何だろう。見ている観客はエラーに対して拍手している。[中略] やっぱり男の観客たちは、スポーツよりもスポーツで表現している「女」を見に来ていたのだ。女子野球団がまじめなスポーツ的意欲をもっているならこういう「女」の魅力で補わなければならない未熟な技術はまだ観客の前に出すべきではない。がそういう理屈はともかくとして「男のすることを女もする」という現代の平等的な風俗の中に、案外女を生物的なものにまで引下げて扱う旧時代の心がまぎれ込んでいることを考えさせられた。

（「女子野球_家庭」『朝日新聞』1950年8月10日、東京朝刊、p.4。）

この頃、「戦後派」という新しい時代感と「秩序破りのはみだしもの」を揶揄した表現で、「アプレゲール」という言葉がよく使われた。平林のこの意見も、まさに「アプレゲール女性」を批判したものである。女子野球は、技術面における未熟さゆえ「女」の魅力を取り入れて観客を集めたが、結果として、女性解放の象徴や新しい時代のものというより「秩序破りのはみだしもの」の方にみなされたのだった。これは女子野球自体の評価を下げることに繋がったとも考えられる。

そうした流れは1970年代まで続いていたようだ。1978年、フジテレビが公募して女子野球チームを作ったことが報じられている。公募して集まったのが約3200人、2度にわたる入団テストで31人まで絞られ、春にはキャンプインするなど、本格的に取り組まれていたものの、エンタメ色はかなり強かった。それが示された2つの記事を紹介する。1つめは、メンバー選抜後に出された記事で、2つめは、結成されたチーム「ニュー・ヤンキース」が始動して約2か月、元メンバーの広岡祥子さんの話が紹介された記事である。

公募には一歳から四十八歳まで三千二百四十一人が志願したが、二度にわたる入団テストの結果残ったのは三十一人で、平均年齢は十八歳。局

側の発表資料には平均身長一六〇・二センチ [原文ママ] とともになぜか平均バストの数字だけあってこれが八二・六センチ [原文ママ]。

(「女子野球に応募ワンサ__反射光」『朝日新聞』1978年3月1日、東京朝刊、p.24。)

野球だけでなく歌も、ということになり、三月末にやめました。一カ月ちょっとでしたが、野球って、ただとったり、打ったりするだけじゃダメで、フォーメーションがあったり、難しいんですね。それに、チームワークというか、父(達朗氏=ヤクルト監督)の監督業の苦労もわかりました。でも面白い。やめることになったのは残念です。

(「女子野球元メンバーの広岡祥子さん__私と高校野球」『朝日新聞』1978年5月14日、東京朝刊、p.21。)

チーム結成当初から「女」の魅力が提示されており、後に歌を始めることになるなど、野球とは関係のない要素で注目を引こうとされている。広岡さんのように純粋に野球をしようと入団した女性たちに対し、フジテレビ側は「女」の魅力やエンタメ性を重視していたと言える。

その後、広岡さんに続くように退団者が続出したが、再度選手の募集がかけられると、4000人もの応募者が殺到したという³⁶。応募者のうちどれほどの女性が「野球選手」を志し、どれくらいが「歌う選手」に憧れていたかはわからないが、野球をすることに前向きである女性は少なくなかったと言えるだろう。

以上のように、戦後は「女性解放」の機運に乗った「アプレゲール女性」など、野球に挑戦する女性は大きく増える。一方で、女子野球に対して向けられる目線は変わらず、戦前と近いものがあった。女性が行う野球は男性の野球に比べて技術力に劣り、平林の言葉で言えば「スポーツで表現している「女」の方が注目された。1950年に誕生した女子プロ野球の記事はほとんど見当たらず、サロンパス女子野球チームが海外遠征を行った際も、試合結果が小

36 「女子野球にまた4000人」『朝日新聞』1978年5月28日、東京朝刊、p.23

さく報じられた程度であったことから、女子野球に対する大衆の関心はかなり低いことがうかがえる。また、見世物としてのイメージが強まった女子野球は批判対象でもあった。

第3節 1980～1990年代の女子野球の記事

第2節で見たような見世物的な女子野球のイメージが明らかに変化してきたのが1980年代である。1986年、「女の子だって野球に夢中 少女から52歳まで各地でハッスル!」という表題で、女子野球の広がりを伝える記事が掲載された。

「ええっ、女の子が野球やるの」と驚くようでは、「そんなの、おくれてるー」といわれかねない。少女リーグが各地で春秋のリーグ戦をやっているし、さまざまなトーナメントには少女から52歳のプレーヤーが集い、腕を競いあっているのだ。[中略] 広がり、いっそう拍車がかかりそうで、近い将来には男と肩を並べる時代がくるかもしれない。

(「女の子だって野球に夢中 少女から52歳まで各地でハッスル!」『朝日新聞』1986年11月7日、夕刊らうんじ、p.2。)

特に冒頭の1文は、「女も野球をやる時代だ」と考える人が多数派になりつつあることを示していると言える。

同記事では、「神戸山手女短大マンヨーズ」と「洗足学園魚津短大フィッシュャーズ」の12回目の対戦の様子が伝えられていた。「背走でしりもちをつき、打球を他の野手にまかせておしりをさす」ったり、「ポケットにしりばせたゴムバンドでそっと髪の手入れを」したりといった打ち明け話により、女性のお遊びであるような印象を抱きかねないが、「投手は、切れ味鋭いカーブも交じて力投」していたこと、「サインプレーで二塁走者をけん制で刺すチームプレーをみせ」ていたことなど、プレーや技術面に関する記載は、1970年代と比べれば格段に増えている。男性が行う野球との比較がなされ、応用プレーやパワーの面で差は決定的だとされているが、批判的な評価ではなく、女子野球が今後さらに発展していくことが期待されている。さらに、

1990 年、第一回女子軟式野球全日本選手権が開催されることを報じた記事では、「120^キ前後の速球を投げる投手や、外野を軽く超える強打者もいる。スライディングも堂にいったもので、決して「お嬢さん野球」ではない。³⁷」と言い切られている。

1991 年、ついにプロ野球協約の規定が削除され、女性も野球選手に挑戦できるようになった。森井和美さんと則淳子さんがオリックス・ブルーウェーブ³⁸の新人入団テストを受けたことは話題を呼び、朝日新聞でも取り上げられている。それを皮切りに、プロ野球だけでなく、高校野球や軟式野球などにおいても、女性選手の姿が記事に取り上げられるようになる。女子野球の連盟の発足、全国大会の初開催、アメリカの女子プロ野球に挑戦する女性といった報道が見られ、女子野球の露出は増えていく。

中でもよく書き立てられる内容が、「男子部員に限る」とされている高校野球において、女子が男子に交ざって野球に取り組むという、人間ドラマ的な話である。例えば、次のような記事だ。

大阪の高校の硬式野球部にこの春、二人の女子部員が誕生した。日本高校野球連盟の規則で女子は試合に出られないが、男子部員と一緒に毎日、元気に練習に打ち込んでいる。

〔中略〕矢野さんは小、中学校ではソフトボールの選手。四番、主将を務めたこともある。入部の申し込みに行くと「マネジャーではどうか」といわれた。「どうして男の子と一緒にできないの」。思わず涙が出た。それを見て学校側も「そこまでいうなら」。「ユニホームを着たら一緒や」と他の部員も言ってくれた。

（「私も追う、白球の夢 大阪の2高校に女子野球部員」『朝日新聞』
1994 年 5 月 18 日、朝刊、p.1。）

「野球部に入りたいんです」。一九六八年四月、神庭さんは倉敷工業野球

37 「女子野球の初栄冠どこ 軟式の全日本選手権 12・13日 神宮で」『朝日新聞』
1990 年 8 月 7 日、東京朝刊、p.22。

38 現オリックス・バファローズ。

部の土師末吉部長に頼んだ。当時の倉工は、六七年春から六八年夏まで四季連続甲子園に出場していた黄金時代。部長、監督は「練習の差し支えになりはしないか」と頭を抱えた。「マネジャーにでもなれば」と思ったが、神庭さんはかたくなにプレーヤーにこだわった。

[中略]神庭さんは、すべての練習に参加できたわけではない。フリーバッティングになると、球拾いにまわった。日本高野連の規定では選手は「男子」に限られている。試合、そして甲子園の土を踏むという目標もなかった。しかし、練習を休んだ記憶はない。

(「倉工の神庭純子さん 全国高校野球岡山大会(94白球賛夏)」『朝日新聞』1994年7月9日、岡山朝刊、p.0。)

「女子だって三年間やってきた」。十二日に開幕した全国高校野球選手権大分大会の開会式を、新大分球場(大分市)のスタンドからじっと見守る高校生がいた。大分県内でたった一人の女子野球部員、県立佐伯豊南高校(佐伯市)三年の狩生薫さん(一八)。入学以来、男子部員と同じ練習を続けてきたが、日本高野連の規定で公式戦には出場できない。この三年間は練習試合だけで、安打は4本。それでも「野球部に入って、やっぱり、よかったです」と言い切った。

(「史上最多81校に途切れぬ拍手 高校野球福島大会開会式」『朝日新聞』1997年7月13日、福島朝刊、p.0。)

ここで重要な点は、「女子は公式試合に出られない」ということである。男子に交じって野球をする女子選手たちは、近くに女子チームや女子野球部がない、などの理由により、男子ばかりの環境で野球をするを選ぶ。しかし、公益財団法人日本高等学校野球連盟(高野連)の定める大会参加者資格規程は、「その学校に在学する男子生徒³⁹」としている。すなわち、高校球児の憧れである「甲子園」、および甲子園に繋がる地方大会の試合でさえ、

39 第5条 参加選手の資格は、以下の各項に適合するものとする。

(1)その学校に在学する男子生徒で、当該都道府県高等学校野球連盟に登録されている部員のうち、校長が身体、学業及び人物について選手として適当と認めたもの。
(令和6年度大会参加者資格規程より)

女子選手は参加資格がない。そのような条件のもと、男子選手と同じ練習メニューをこなし、時には部員との人間関係に悩みながらも、好きな野球に一生懸命な女子選手。そんな健気な姿が、記事の中で多く描き出されるようになったのである。

以上のように、1980～90年代は、女子野球の広がりが肯定的に書かれ、見世物やショー的なイメージが薄くなっていった。加えて、男子との技術的・身体的な差を認めながらも、さらなる発展が期待されるようになった。女子野球が報じられる機会が増加してきた一方で、女子が野球をするには十分な環境が整っていないことや、野球をするには男子部しかないなど、逆境がゆえに女子選手に注目されることが多い。

1994年の新聞記事のなかに、以下のような問題提起もされている。

女子野球は女子野球選手が好奇の視線を感じずに、プレーできる日は来るのだろうか。それとも、その視線こそが、女子野球の「興行的価値」なのだろうか。

（「女子野球振興への道は？ プロ野球（チェンジ）」『朝日新聞』1994年6月25日、朝刊、p.21。）

確かに、先に取り上げたような記事に描かれる女子選手の覚悟や努力は称賛に値するだろう。しかし、1990年代、女子野球が受け入れられてきた中でも、1970年代頃までと違った「好奇な視線」が「女子野球の「興行的価値」」として存在していたと言えよう。

第4節 2000年代以降の女子野球の記事

2000年代以降、各記事は小さかったり、地方紙の掲載であったりするものの、記事の数としては大幅に増加してきた。内容も、全国大会の開催やその結果、ワールドカップに関する報道、一層拡大傾向である女子野球部やチームの設立、1990年代に引き続き女子選手を紹介する記事など、多様にもなりつつある。

特に地方では、女子選手を応援し受け入れようとする流れが強いことがわ

かる。各都道府県の学校やチーム、出身選手の活躍は、各地方紙で取り上げられる。また、高校野球の報道の端に、地方大会の始球式を女子選手が務めたことを報じるようなパターンはよく見られた。

女子野球や女子選手を批判するような意見はほとんど見られないが、女子選手を受け入れる体制は未熟である。女子野球が徐々に普及してきたからこそ、女子選手の活躍の場が不足していることは一層大きな課題としてあらわれている。2013 年、一般の人の寄稿に、こんなやり取りがあった。

(声) 野球好き女子に活躍の場を

[中略] リトルリーグや中学、高校でも女子選手は少しずつ増えていますが、進学するにつれて活躍の場が少なくなります。高校で断念し男子野球部のマネジャーになったり、ソフトボール部に入ったりする女子がたくさんいます。でも、彼女たちは野球がしたくてたまらないのです。

[中略] 女子野球もさらに発展し、多くの選手が活躍できる場が増えることを願います。

(「(声) 野球好き女子に活躍の場を」『朝日新聞』2013 年 10 月 31 日、朝刊、p.14。)

(声) 野球好きの娘、今後の選択は

「野球好き女子に活躍の場を」(10月31日)を読んで胸が熱くなりました。学年が上がるにつれて女子野球選手は活躍の場が少なくなるという現状は、今まさに我が家が直面している話です。

[中略] 情熱を持って野球に取り組んでいるのに、女子だからという理由で他のスポーツに転向することは、本人はもちろん親としても心苦しい選択です。男子のチームに入っても、中学生になれば男女の体力差は歴然でしょう。

小学校最後の公式戦に向けて頑張る娘を頼もしく思う一方、この先どうしてやればいいかと思いあぐねております。

(「(声) 野球好きの娘、今後の選択は」『朝日新聞』2013 年 11 月 4 日、朝刊、p.8。)

女子野球の発展を願った寄稿に呼応する形で、一人の母親が、女子選手の活躍の場が少ないことを訴える寄稿をしている。女子野球の普及や発展と、それに伴う環境面での課題は、大衆の身近なところで感じるようになったことがわかる。この記事の掲載後である 2021 年には、全国高校女子硬式野球選手権大会の決勝が阪神甲子園球場で行われることとなり、女子選手の“憧れ”が“目標”となった。女子選手と彼女らを支える人々の努力により、ここ数年で活躍の場の課題も改善されつつあることも確かである。

このように、2000 年代は、新聞での報道量や、女子野球が大衆の身近な話題となってきたことから、女子野球がより一般化してきていることが読み取れる。

第 5 節 まとめ：女子野球に向けられる大衆の視線の変化と、変わらないもの

ここまで、戦前から 2000 年代までの「女子野球」の新聞記事を分析してきた。1970 年代頃までは、女子野球に対して批判的な意見が持たれていたり、ショー的に観戦されていたり、あまり歓迎されてこなかった。1980 年代以降は、限られた環境の中で野球に一生懸命であるという点で、女性選手は注目・応援されるようになっていく。2000 年代においても、第 4 節で紹介した記事の寄稿をした人たちは、女性選手の「野球がしたくてたまらない」「野球が好き」という気持ちへの共感から、女子野球の発展を願っているとも言える。野球は男性のものであるという決めつけや、女性蔑視的な視線から、女性選手を応援する方向へと大きく変化してきたことがわかった。

男性のプロ野球であれば、野球観戦の楽しさ・娯楽性(エンタテインメント)が観戦動機として重要だとされる。また、男性においては選手の高い技術を見ることも重要になるようだ⁴⁰。技術力やパワーに欠ける女子野球は、勝敗や競技そのものよりも選手やチームの努力、取り組み方といった面が鍵を握

40 岡田康太・東川安雄「プロ野球における観戦動機に関する研究：広島東洋カープファンを事例として」『運動とスポーツの科学』22 (1)、2016、pp.75-80.

ると考えられる。「女性選手の頑張り」が応援する大きな動機になりうるのである。

一方で、女子野球は男性との比較が避けられない。元近鉄バファローズ投手の太田幸司は、「女子プロ野球の実力は、男子の中学生のボーイズリーグぐらゐかな。でもね、彼女たちの魅力は上手下手じゃない。一生懸命さです。⁴¹」と述べている。また、女子プロ野球を観戦に来た人はインタビューで「技術どうこうじゃない。あの一生懸命さが胸を打つ。元気をもらえる⁴²」と話していたりする。女子野球の魅力は、先述のように「女性選手の頑張り」が挙げられているが、女子選手の技術が男性に劣ることを前提において語られている。女子野球を応援する姿勢の裏には、男性優位な視点が堅持されているのである。

長い年月をかけて女子野球が発展し、応援する人が増えているものの、野球が男性のスポーツであることや、男性優位的な視線は、未だ根強く残っている。

第3章 マンガに描かれる女子野球 --- 女子野球選手のジェンダーイメージの越境

『巨人の星』(1966～1971年)、『ドカベン』(1972～1981年)、『タッチ』(1981～1986年)、『MAJOR』(1994～2010年)など、“野球マンガ”としての長く愛される作品の数々。野球を題材にした作品数は枚挙にいとまがない。選手同士のヒューマンドラマや、試合の勝敗を決するまでの手に汗握る展開、球場での観戦では見られない心理戦の模様など、野球マンガは様々なストーリーを提示してきた。では、女子野球を描いた作品はどれほどあり、どのように描かれてきたのか。本章では、女性が野球に取り組むマンガ作品を分析、考察する。

マンガやアニメは「視覚メディア」に含まれると言える。「視覚メディア」

41 「(ますます勝手に関西遺産) 女子プロ野球 行くが乙女のど根性」『be 2 (朝日新聞)』2013年3月13日、夕刊、p.3。

42 同上

は、見られる世界と見る主体との間に介在し、何をどのように眺め表象するのかを規定する「視覚制度」を作り上げ、主体の見る行為に文化的で社会的な何らかの意味を付け加える⁴³。

よって、マンガ作品の中で、女子野球がどのように描かれ、物語世界の中で女子選手はどのような存在であるのかを分析することで、野球という「男の世界」における女子野球や女子選手のイメージ・表象について考察を試みる。第1節では女子野球が題材となったマンガ作品を概観し、分析対象を絞る。第2～5節で対象とする各作品を分析した後、第6節でまとめ、考察していく。

第1節 作品一覧、分析対象

はじめに、女子野球及び女子野球選手が登場するマンガ作品を概観する⁴⁴。筆者が調査し、管見の範囲で一覧にしたものが表2である。上から発表年順に並べ、作者（原作者）、出版社、主たる読者層と作者（原作者）の性別を記載した。主たる読者層は、各作品もしくはその掲載誌が「少年マンガ」「青年マンガ」に分類されている場合は男性向けのマンガ、「少女マンガ」「女性マンガ」に分類されている場合は女性向けのマンガと判断している。

43 伊藤守編『よくわかるメディア・スタディーズ[第2版]』ミネルヴァ書房、2015、p.38

44 女子野球を描いたアニメ作品には、『野球狂の詩』（1977年）、『プリンセスナイン 如月女子高野球部』（1998年）、『大正野球娘。』（2009年）、『八月のシンデレラナイン』（2019年）、『球詠』（2020年）などがある。原作がマンガ、ライトノベル、ゲームアプリなど、メディアミックスが多い。

表 2 女子野球及び女子野球選手が登場するマンガ作品（筆者作成）

作品名	発表年	作者（原作）	出版社	主たる読者層 （男性/女性）	作り手の 性別 （男性/女 性作者）	備考
野球狂の詩	1972-1977	水島新司	講談社	男性	男性	
おんな甲子園！	1987	野妻まゆみ	白泉社	女性	女性	
ボンジュール・ベース ボール	1990	中山星香	宙出版	女性	女性	文庫版：双葉文庫
メイプル戦記	1991-1995	川原泉	白泉社	女性	女性	
君は青空の下にいる	1995-1999	森本里菜	集英社	女性	女性	
野球狂の詩 平成編	1997-2000	水島新司	講談社	男性	男性	
鉄腕ガール	2000-2002	高橋ツトム	講談社	男性	男性	
新・野球狂の詩	2000-2005	水島新司	講談社	男性	男性	
神様がくれた夏	2002	えぬえけい	講談社	女性	女性	
剛球少女	2002-2003	田中誠一（原作）	実業之日本社	男性	男性	
アイドルA	2005-	あだち充	小学館	男性	男性	不定期連載。現在第5話ま で発表している。
しらたまししょうじょ 白球少女	2007-2010	山崎毅宣	フレックスコミックス	男性	男性	
高校球児ザワさん	2008-2013	三島衛里子	小学館	男性	女性	
D×H	2009-2010	竹林月	ジャイブ	男性	男性	
マックミラン高校女子 硬式野球部	2011-2013	須賀達郎	講談社	男性	男性	
マックミランの女子野 球部	2013-2014					
しこたま	2012-2013	ニシカワ醇	秋田書店	男性	男性	
ボール・ミーツ・ガール	2012-2013	綱本将也（原作）	集英社	男性	男性	
勝利の女神だって野球 したい！	2013-	松本ミトヒ。	泰文堂	男性	女性	
セーラーエース	2015-2017	しげの秀一	講談社	男性	男性	
花鈴のマウンド	2016-	紫々丸	大垣書店	男性	男性	「紫々丸」は角谷達曜知 のペンネーム。
たろよみ 球詠	2016-	マウンテンブクイチ	芳文社	男性	？	
クロスプレイ-CLOSE PLAY-	2017	芹之由奈	スクウェア・エニックス	男性	女性	
なでしこナイン	2017	東元	主婦の友社	男性	男性	
フジマルツ！	2017-2018	詠里	講談社	男性	女性	
東京野球女子百景	2018-	水森崇史	秋田書店	男性	男性	四コマ漫画
松井さんはスーパー・ ルーキー	2020-2021	詠里	講談社	男性	女性	

表2を見ると、主たる読者層、作り手ともに、男性が多いことは一目瞭然である。近年では、女性が男性向けのマンガを描いている場合も見られるが、女性に向けた女子野球マンガはほとんどない。1987～2002年は女性向けマンガが複数制作されているが、これはプロ野球の人気の比較的高かった時期である。NPBが公表している、リーグ別の年度別入場者数（1試合平均）をグラフ化してみると表3のようになる。セ・リーグとパ・リーグは同様の推移になっており、セ・リーグに着目して見れば、1987年から2004年の17年間は常に3万人を超えている。パ・リーグにおいても入場者数が増加し、その人気が定着してきた時期である。この長い野球人気の高まりは女性ファンが鍵を握っており、当時「男性中心のプロ野球ファンの構造を揺さぶりつつ⁴⁵」あった。また、セ・リーグに人気劣るパ・リーグは、女性ファンの開拓のために、1993年のキャッチフレーズを男らしさや格好よさをイメージした「SEXY」と設定している⁴⁶。このような野球の人気、女性ファンの増加によって、女性をターゲットにした野球の物語も複数作られたと考えられる。

分析対象とするのは、表2のうち以下の5作品とする。アニメ化⁴⁷・実写映画化⁴⁸もされ絶大な人気を博した①『野球狂の詩』（水島新司、1972～1977年）、その続編であり、野球協約の改定（1991年）後かつ野球人気が高まった時期に連載されていた②『野球狂の詩 平成編』（水島新司、1997～2000年）、③『新・野球狂の詩』（水島新司、2000～2005年）、近年のマンガから、作り手が女性の④『松井さんはスーパー・ルーキー』（詠里、2020～2021年）、連載が長く、幅広くメディアミックス⁴⁹されている⑤『球詠』

45 「強さプラスアルファにひかれる プロ野球女性ファン」『朝日新聞』1989年8月4日、朝刊、p.16。

46 「プロ野球パ・リーグがキャッチフレーズ「SEXY」」『朝日新聞』1993年1月30日、朝刊、p.21。

47 1977～1979年、フジテレビにて放送。各話1時間ほどで、全25話。

48 1977年3月公開。配給は日活。監督は加藤彰、勇気役は木之内みどりが務めた。

49 2020年にはアニメ化され、アニメ専門チャンネル等で配信されたことを始めとして、2021年には東京で舞台化、2020年にアプリゲームでコラボ登場したり、2020年に叡山電鉄とのタイアップが行われたりと、『球詠』の人気のうかがえる。

(マウンテンクイッチ、2016年～)の5作品である。なお、『球詠』は未完結のため、2023年12月時点で発行されている14巻までを対象としている。1970年代(①)、2000年前後(②、③)、2020年前後(④、⑤)と、時代ごとの比較や、作り手の性別による作品の比較(④と他作品)を行っていく。

表3 年度別1試合平均の入場者数(リーグ別)

(NPB「セントラル・リーグ年度別入場者数(1950-2022)」と「パシフィック・リーグ年度別入場者数(1950-2022)」より作成、<https://npb.jp/statistics/>(最終閲覧日:2024年1月11日))



第2節 『野球狂の詩』:「女らしさ」の強調

はじめに、『野球狂の詩』を分析する。この作品は1972～1977年に『週刊少年マガジン』(講談社)にて連載された。野球協約の「医学上男子でないものを認めない」という規定を乗り越え、「女性初のプロ野球選手」として、東京メッツ(以下、メッツ)というチームに入団するのが水原勇気(以下、勇気)である。左投手として男子に匹敵するプレーをすること、および「ドリーム・ボール」という決め球(魔球)の習得を目指す物語だ。

第2章の第2節で見たように、連載当時、女子野球選手は「スポーツで表現している「女」」の方が注目され、女子野球に対する大衆の関心はかなり

低かった。また、見世物としてのイメージが強まっており、批判対象でもあった。そんな中、女性のプロ野球選手を登場させた『野球狂の詩』は先駆的であったと言える。

しかし、勇気的女らしさは崩されず、物語の中で野球は「男の世界」であることがより強調されている。勇気は、美人で小柄な細身の体型で描かれ、胸を意識した表現など、性的対象とされている。試合の場面でも、「こんなにかわいい子がどうして野球しなきゃならないの⁵⁰」(図6)など、「かわいい」「美人」であることが周囲の人々が口にする場面が複数ある。たしかに、大きな黒目に光が入り、まつげの長い目は少女マンガの目のようで、肩にかかる黒髪は「美人」な勇気の特徴だ。(図7)ただ女性が野球をするのではなく、「かわいい子」が野球をするのである。

図6・7 「かわいい子」として見られる勇気
(『野球狂の詩』(文庫版) 10巻 p.30)



勇気がメッツの合宿に参加する場面では、マンツーマンで勇気に指導する同僚選手の武藤が、勇気のお尻を叩いたり、胸を触ったりしている。周囲の選手たちは、「指導として」勇気の身体に触れている様子を見てうらやまし

50 水島新司『野球狂の詩』(文庫版) 10、講談社、1995、p.30。

がる。(図8)武藤自身は性的な意味はなく触れているように描かれているが、周囲の選手や読者は、過剰に身体に触れる様子から、「性的な対象としての勇氣」という認識を持たされる。加えて、勇氣がヘッドスライディングをしたシーン(図9)では、周囲が胸を心配するなど、勇氣のプレー中の姿にも性的な視線が提示されている。勇氣は胸を強調して描かれているわけではないが、周囲の登場人物の様子から、読者にも性的な視線を提示している。

図8 勇氣のお尻を叩く武藤(『野球狂の詩』(文庫版)10巻p.249)

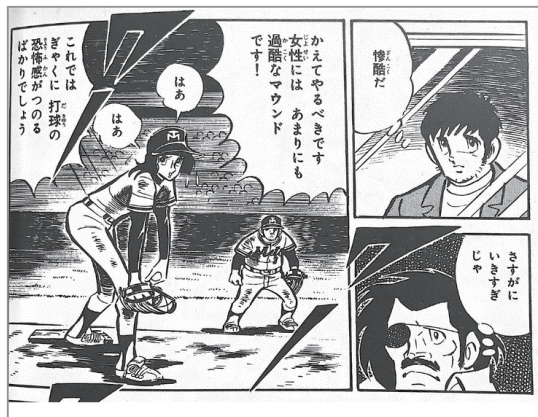


図9 ヘッドスライディングした勇氣の胸を心配する周囲の反応
(『野球狂の詩』(文庫版)10巻p.94)



また、「女性は野球をするべきではない」と解釈できるような表現も多く出てくる。試合の場面で勇気が打球を怖がると、相手チームは勇気を狙ったヒッティング、すなわち「ピッチャーがえし作戦」で攻め、メッツはなかなかアウトが取れない。これに対し、会場の解説者は「かえてやるべきです女性にはあまりにも過酷なマウンドです！⁵¹」（図 10）と話す。同様に、「もともと女はスタミナがない⁵²」ことを狙って勇気をつぶす作戦など、「女性の弱点」が野球において不利であることが強調される。また、周囲に好かれる女性が、美人でか弱い存在として描かれている点で、それが理想の女性像であることを示しているとも捉えられる。「理想の女性像」と「野球」は相容れないのである。

図 10 「女性にはあまりにも過酷なマウンドです！」という会場アナウンス
（『野球狂の詩』（文庫版）11 巻 p.250）



男性から「女性は野球に向かない」とみなされているだけでなく、勇気自身も、男性への憧れを抱いている点は注目すべきだろう。女性がプロ入りす

51 水島新司『野球狂の詩』（文庫版）11、講談社、1995、p.250。

52 同上、10 巻、1995、p.43。

るのは絶望的かと思われたとき、勇気は「ただとてもうらやましいんです。」「こんなにもすばらしい野球をやれる男の人たちが……」「わたし男に生まれなかった……」⁵³と話し、直接的に男性への憧れを口にする。また、なんとかプロ入りが認められた後も、武藤に「男としてあつかう」と言われたことに対し、「のぞむところだわ……」⁵⁴と決意し、トレーニングにより力コブが出てきたり、胸が小さくなったりすると、勇気は満足そうな表情を浮かべていた。女性として、もしくは性別関係なく、野球に取り組もうとしているのではなく、男性に近い身体やパワーを手に入れようと努力している。

以上のように、『野球狂の詩』では「女らしさ」が強調され、女性選手に対する性的視線が提示されている。また、男性・女性の両者から、「野球は男性がするもの」であると示すように描かれていた。

第3節 『野球狂の詩 平成編』『新・野球狂の詩』：変わらぬ女性蔑視と「女らしさ」

この節では、『野球狂の詩』の続編にあたる『野球狂の詩 平成編』と『新・野球狂の詩』を分析する。この2作が制作・発表された1997-2005年には、現実世界でも野球協約第83条、性別による選手の規定は撤廃されている。物語世界は、現実世界と同様、『野球狂の詩』の時代から20年ほどが経ったメッツや勇気が描かれる。

現実的に女性もプロ野球選手になれるようになって、女性が低く見られる表現は多い。コーチとしてメッツに復帰した勇気だったが、ファンから「だいたい女がコーチというのがおかしいんだよ!!」⁵⁵とヤジを受ける。さらに自らリリーフとして登板すると、観客や相手チームは「女~~~~!!」⁵⁶と驚き、「他の投手と違うと言えば「女」という武器かいな」⁵⁷と皮肉まで言われていた。投手としての実力を示していても、やはり女性は野球の世界

53 水島新司『野球狂の詩』（文庫版）10、講談社、1995、p.162。

54 同上、p.192

55 水島新司『新・野球狂の詩』1、講談社、2001、p.16。

56 同上、p.20。

57 同上、p.21。

にそぐわないものと捉えられている。

『野球狂の詩』で勇気がアイドル的な存在として、また、性的対象として描かれていたのに対し、『野球狂の詩 平成編』や『新・野球狂の詩』では、妻・母親としての女性像が提示されはじめる。象徴的だったのは、「女の花道」と題された『新・野球狂の詩』第8話である。勇気に次ぐ女性投手・国立珠美（以下、珠美）が結婚するか、野球を続けるかで悩む様子が描かれている。野球をやめて彼についていくと言う珠美に対し、最後の餞として珠美を先発させ、「女の花道」を作ってあげようとチームメイトが奮闘する。結婚が「女の花道」とされており、結婚することが女性の理想とされている。また、『野球狂の詩 平成編』1巻では勇気の娘が登場しており、母親になっていることが示されている。珠美が結婚を決断した際も、勇気は珠美を引き止めることはできず、「私も少し考えたらずと説得したんですけど…ただ同じ女として幸せな結婚生活もわかるだけに⁵⁸」と述べている。

野球か結婚かの二者択一であったことや、勇気の夫の存在は一切触れられず、結婚生活は描かれなことから、野球と結婚は交わりにくい、両立の難しい印象を受ける。「女性は野球に向かない」ことが強められているように捉えられる。一方で、珠美は結局、結婚ではなく野球を選んでいることから、自分のやりたいことをする、自由で自立した女性像が描かれているとも言える。

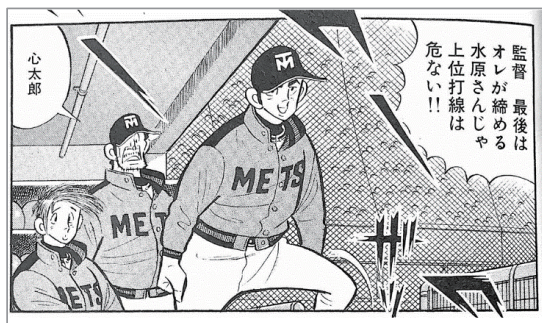
そんな自立した女性像や、男性選手を相手に活躍する部分を見せつつも、勇気や珠美は重要な場面では男性の手助けを必要とする。結婚による引退を宣言した珠美が先発した試合、珠美は何度もピンチに見舞われるも、仲間の好プレー・好打線により0点に抑える。その後のピンチの場面でリリーフに勇気も登板するが、上位打線に対しては男性選手が投げ、試合を締めた。(図11) また、ヘッドコーチの五利一平（以下、五利）がチームを去り、監督の岩田鉄五郎が怪我で入院してしまったとき、勇気が代理監督を務める。はじめは勝利もおさめていたが、後に11連敗という絶不調に陥る。12連敗が危ぶまれるなか、五利がメッツに戻ってくると、勇気は五利に泣きついた。(図

58 水島新司『新・野球狂の詩』、2巻、2001、p.8。

12) その日の試合ではメッツが勝利し、連敗を止めたのだった。

以上のように、協約が改訂された後もなお、女性選手としてすぐ受け入れてもらえる環境ではなく、勇気や珠美は見くびられることが多い。また、野球選手だけでなく、妻・母親としての姿も付与され、「女性は（野球をするのではなく）家庭」という考え方を思わせる。勇気や珠美がピンチの場面では男性に助けられ、女性が男性の助けを必要とするなど、彼女らにフォーカスが当たる物語では「女らしさ」や理想の女性像が描かれている。

図 11 勝利を確実にするため、男性投手が登板を申し出る
（『新・野球狂の詩』2巻 p.31）



つ

図 12 五利に泣きつく勇気（『新・野球狂の詩』9巻 p.195）



第4節 『松井さんはスーパー・ルーキー』：『野球狂の詩』シリーズ からの変化と女性作家の傾向

次に、この節では2020～2021年に『イブニング』（講談社）および『コミック DAYS』（講談社）にて連載された『松井さんはスーパー・ルーキー』を分析する。社会人の草野球が舞台であり、学生時代の多くは野球をして過ごした女性選手の松井真尋（以下、松井さん）と長嶋圭人（以下、長嶋）の恋模様が物語の軸となっている。しかし、野球をするシーンの描写や内容は本格的に描かれている。

この作品においても、『野球狂の詩』と同様に、松井さんは周囲の男性たちから見くびられる。草野球の助っ人としてやって来た松井さんは、女性であることから周囲に舐められ、怪我をしないか心配される。（図13）相手チームの投手からは、松井さんが打席に立つと、打ちやすいコースに緩い球が投げられるなど、あからさまな態度を取られる。

図13 周囲から見くびられ、怪我を心配される松井さん
（『松井さんはスーパー・ルーキー』1巻p.19）



しかし、彼女は昔から同様の経験をしてきたと話しており、中学生の頃、男子チームに所属して出場した試合では松井さんのエラーで負け、「女なん

か出すから⁵⁹」負けた、と言われた過去がある。(図 14) 松井さんは、それでも「野球って…やめられないんですよ そんなことぐらいで⁶⁰」と、その後もやめずに続けたことを明かしている。

図 14 試合に負けた理由を女性が出場したことだと言われる回想シーン
(『松井さんはスーパー・ルーキー』2巻 p.70)

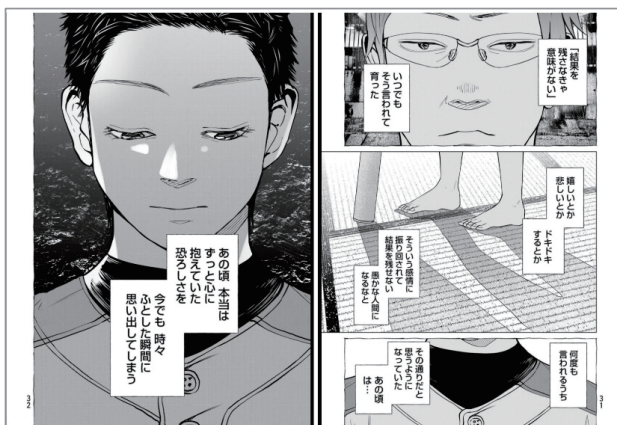


松井さんの敵・障壁は男女差や男子選手ではなく、母に「やらされてきた野球」に縛られることから脱し、「自分が選んだ野球」をすることであった。男子選手に対抗するための「魔球」の習得や、男女差に苦しみ乗り越えることよりも、自分の中にある辛い過去や苦い経験を乗り越えることにフォーカスが当たっている点は、特に女性が男性の集団に交ざって野球をする物語において、『野球狂の詩』シリーズの1970～2000年頃と比べて変化が見られる。この変化によって、「女性」選手であることの特異さ、野球から女性を排除するような印象は緩和されている。

59 詠里『松井さんはスーパー・ルーキー』2、講談社、2021、p.70。

60 同上、p.72。

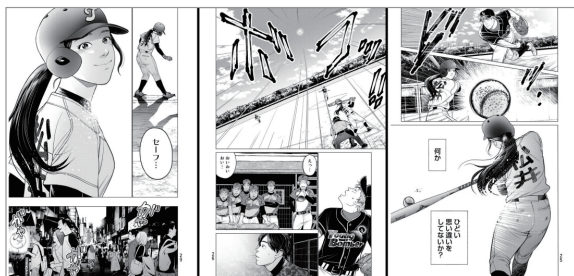
図 15 過去の思い出に囚われる松井さん
 (『松井さんはスーパー・ルーキー』3巻 pp.31-32)



『松井さんはスーパー・ルーキー』において女性選手が見くびられる描写がある点は、『野球狂の詩』シリーズとそれほど変わらないが、異なるのは、物語に登場する女性選手は、野球の実力で相手を見返していることである。草野球という、楽しむことを目的とした人も多い環境であることから、女性選手の野球の上手さは際立っていた。周囲からの好奇の目線はあるものの、女性本人は「野球は男のスポーツ」というジェンダー・バイアスを越境し、怯む様子は見せていない。その例に以下の2つの場面を挙げる。

1つは、物語内での松井さんの初打席、図13の場面が続くシーンである。その場にいた誰も（男性）が、女性である松井さんを低く評価していたが、その予想を裏切り、松井さんはセンター越えの三塁打を放った。(図16)

図 16 松井さんが周囲の予想を裏切り、男性投手からヒットを奪う。
(物語は右から左の流れ。『松井さんはスーパー・ルーキー』1 巻 pp.25-26,29)



もう1つは、松井さんの友達で野球経験があり、女性捕手の琴平茜（以下、茜）が盗塁を刺すシーンである。男性捕手が試合に欠席となり、茜が代わりにを務めると、キャッチャーが女性であることを理由に走者が盗塁をする。すなわち、女性は球速が遅い、男性走者のスピードに対して女性は盗塁を刺せないと決めつけている。しかし茜は完璧な送球を見せ、走者はアウトになったのだった。

図 17 茜が盗塁を刺し、周囲を驚かせる。
(『松井さんはスーパー・ルーキー』2 巻 pp.170-171)



野球の実力で女性が男性を打ち負かし、勝つような場面・物語は、女性作家の傾向であると言える。詠里の『松井さんはスーパー・ルーキー』のほか、川原泉の『メイプル戦記』もそうである。『メイプル戦記』は、新しく創設された女子プロ野球チーム「スイート・メイプルス」が、男子プロ野球チームを相手にベナントレースを戦う物語だ。相手チームから舐められたり、女の野球を「馬鹿げたこと」と見下す他球団選手と、メイプルのメンバーとの夫婦問題であったり、様々な問題乗り越え、最後にはメイプルスがリーグ優勝して物語が終わる。水島新司の『野球狂の詩』であれば、一貫して男性優位な描写が多く、勇気が選手人生を懸ける思いで投げたドリーム・ボールは打たれてしまっている。それに対し、女性作家のこの2作品は、はっきりと女性が勝つ描写がある。女性選手を勝たせることで、男性優位な野球において女性が野球をすることの妥当性を示し、ジェンダー・バイアスへ異を唱えようとしていると考えられる。当然、男性作家が女性を勝たせたり、女性作家が女性を負けさせたりすることもあるだろう。しかし、女性作家だからこそ、女性が勝つ場面は明示的になっているのではないだろうか。

以上のように、『松井さんはスーパー・ルーキー』において、男性からの女性蔑視はあるものの、女性選手本人はそれをほとんど気に留めず、男性に劣る様子を見せていない点は、『野球狂の詩』シリーズからの変化である。女性作家の傾向と考えられる、女性が男性に勝つ描写も見られた。また、女性選手の障壁はジェンダー・バイアスによるものではなく、過去の自分や母との関係であった。性別を問題としない、一人の選手として描かれていることから、「野球は男のスポーツ」であるというイメージを越境しようとしていると考えられる。

第5節 『球詠』：コマ構成と投球シーンでの女性選手の表象

この節では、2016年から『まんがタイムきららフォワード』（芳文社）にて連載中である『球詠』を分析する。高校の硬式野球部が舞台であり、2020年にアニメ化された。主人公で投手の武田詠深（たけだよみ、以下、詠深）をはじめ、「新越谷高校」に集まった女子高生たちが、停部していた野球部を立て直し、友情を育みながら全国大会を目指す物語である。

『球詠』は、選手や監督、相手チームも含め、登場人物が全て女性であるのが特徴だ。新越谷高校が「女子」校とも「女子」野球部とも表現されていないが、徹底して男性が排除されて物語が繰り広げられている。女子による野球がメジャーである世界であり、当然男女差は描かれず、障壁として存在しない。『松井さんはスーパー・ルーキー』と同様、過去のつらい経験や部活動における苦難を乗り越えていく。例えば、詠深は、中学時代はやる気のない野球部に所属していた。投げたい変化球を投げさせてもらえず、所属するチームも勝てず、一度は女子野球の道を諦めていた。しかし高校生になり、変化球を捕ってくれる幼馴染のキャッチャーとの再会や、真剣に野球に取り組む仲間に出会うことができ、再び野球に取り組むことを決める。野球を楽しみながら勝ち上がっていくことを目指す過程には、男性の助けなどはなく、野球を通して少女たち自身で成長していく。

『球詠』で印象的なのは、短いユニホームのパンツである。今日の女子野球のユニホームは、長いパンツやストッキングを着用するのが一般的である。(図18)『球詠』において登場人物の大多数が短いパンツを履いていること、すなわち、作者が登場人物にあえてショートパンツを履かせているのは、脚を強調するためだと考えられる。(図19) 身体的な「女らしさ」が強調され、各キャラクターに性的対象としての印象も付されることで、読者からの性的な視線は受けやすい。

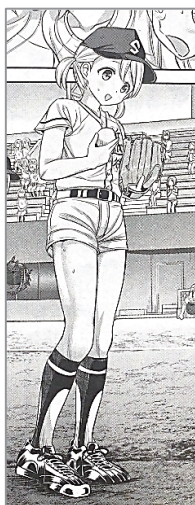
図 18 全国高等学校女子硬式野球選手権大会に出場した

岐阜第一高等学校のユニホーム

(第 27 回全国高等学校女子硬式野球選手権大会ホームページ、大会コラム「福井工業大学付属福井 vs 岐阜第一」(福井工業大学付属福井 vs 岐阜第一；第 27 回全国高等学校女子硬式野球選手権大会 (girlsbb-natsutai.jp)、2023 年 7 月 29 日公開)最終閲覧日：2024 年 1 月 4 日)



図 19 『球詠』新越谷高校のユニホーム (『球詠』6 巻 p.142)



しかし、この短いパンツは、性的な意味以上の効果があると考えられる。グローブやスパイク、ユニホーム、キャッチャーの防具などが詳細に描かれているのと同様、パンツから見える脚は筋肉の影まで丁寧に描かれている。筋肉のついた体つきで描かれることによって、『野球狂の詩』で示されていたような弱い女性像を脱しているとも言える。登場人物たちにとって、体つきの良さは野球をする上で強みになり、他校の選手の体の大きさを気にしている様子、体つきで相手の実力を推し測る様子も描かれている。(図 20、21) 短いパンツから見える脚も、鍛えられていることを示すひとつの要素と捉えることができ、彼女たちが野球をする上で、終始筋肉が重要な要素であることは、これまでの作品にあまり登場しなかった『球詠』の特徴である。

図 20 他校の選手の体の大きさを気にしている様子 (『球詠』3巻、p.71)



図 21 ポニーテールの女性の体はキツイ練習によって引き締められている。特に腕、お尻、脚はそれを表している。(『球詠』3巻、p.75)



また、『球詠』におけるプレーシーンの描かれ方にも特徴が見られる。野球において、ピッチャーは試合の勝敗を握る重要なポジションであり、『野球狂の詩』シリーズの勇気や珠美、『松井さんはスーパー・ルーキー』の松井さん、『球詠』の主人公である詠深も、みんなピッチャーである。『野球狂の詩』では、勇気の投球シーンはマンガのコマの中におさめられ、コマの中に全身が描かれることが多い。(図 22) しかし、『球詠』ではコマいっぱいに投手を描いて余白は少なかったり、コマをはみ出して大きく投球フォームが描かれたりする傾向にある。(図 23)

図 22 『野球狂の詩』における投球シーン
 (『野球狂の詩』(文庫版) 右：9 巻 p.215、左：pp.116-117)

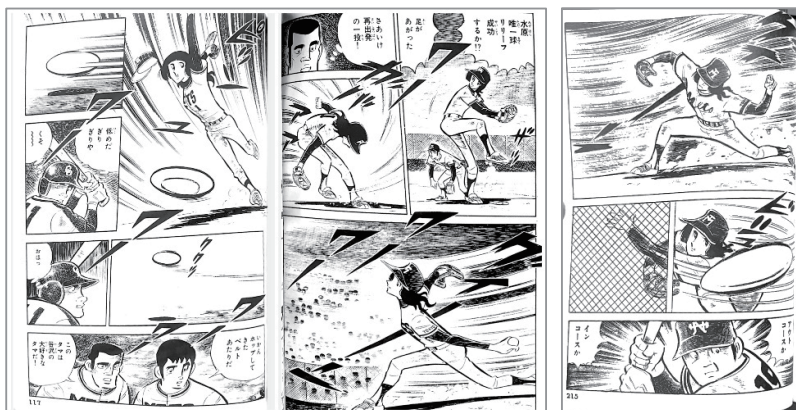


図 23 『球詠』における投球シーン
 (『球詠』 右：3 巻 p.122、中央：5 巻 p.33、左：6 巻 p.27)

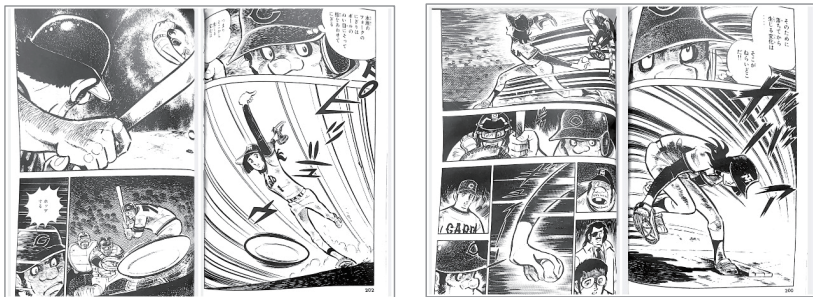


マンガ家でマンガ研究者の夏目房之介によれば、マンガのコマ構成が絵に与える作用、絵を分節して働く機能には、大きく以下の3つがある。(1) 読む順序を与える時間分節の機能、(2) 読者の心理を誘導する圧縮と解放の機能、(3) 絵の枠を限定し、絵の意味を背後で支える空間表象の機能、

である⁶¹。『野球狂の詩』は、限定された絵の枠の中に勇気をおさめ、一步引いた視点から描かれることで、読者は勇気を観察しているような、テレビで観戦する視点に近くなる。特に、重要な1球を投じる際は、球を投げる数秒間を描くのに複数のコマ・ページが使われており、コマの機能(1)時間分節の機能が強く、読者は流れるように視線を動かすはずである。コマ自体が大きくなっても、その中の勇気はそれほど大きく描かれず周囲に余白がある。こうしたコマ構成・描写により、読者は第三者的な視点になり、「ドリーム・ボール(勇気の魔球)が投げられるのか」「打たれるか否か」を想像し期待する。(図24)

図24 『野球狂の詩』の最終話、ドリーム・ボールが初めて打たれる際の投球

(物語は右から左のながれ。『野球狂の詩』(文庫版)13巻、pp.200-203)



それに対し、『球詠』は、コマ内の余白が少なくなり投手が前面に押し出されることで、読者は投手の表情などをしっかり読み取ることができ、アップで描かれる投手に感情移入しやすくなる。重要な1球を投じる際は、投手の体の一部や投げた球の軌道がコマの枠を超えて描かれ、『野球狂の詩』とは逆にコマの機能(1)時間分節の機能が緩められる。コマをはみ出した部分が他のコマにかかっていることで、各コマは同一の瞬間の描写となる。図

61 夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか：その表現と文法』日本放送出版協会、1997、pp.152-153。

25のように、読者が投手に感情移入した後、打者や捕手、周囲の人々の様子が目に入ってくると、投手の感じる緊迫やプレッシャーが移入した感情を強め、半ばその投手になったような気分になるかもしれない。

図 25 公式戦で強豪校に勝利する試合、最後の1球。

左ページ中央やや上を横切る線は、右ページから伸びる球の軌道である。

(『球詠』6巻 pp.106-107)



『野球狂の詩』は女性を観察するような視点であり、図24のように打者の内心が文字で表現されていると一層女性の心理を想像しにくい。それに対し、『球詠』は女性の姿や表情に迫っていることで、作者が女性の心理を絵に表す必要が出ることに加え、読者は無意識に女性の心理への移入・想像を促される。野球をプレーする場面において、より女性に迫った描かれ方への変化は、野球において女性が認められてきたことが表れていると考えられる。以上のように、『球詠』は野球における女性選手の特異性や、男性の手助けを必要とする女性像は見られない。ジェンダー・バイアスに囚われていない女子野球を通して、少女たち自身で成長していく。また、露出の多いユニホーム姿によって、体つきを詳細に描くことが可能であり、筋肉のついた体や登場人物の筋肉への執着は、『野球狂の詩』で見られたような女性のか弱いイメージから脱している。また、投球シーンにおいて、投手を大きく描き、コ

マの時間分節の機能を緩めることで、女性選手の心理に迫り、読者に想像させている。これは、女子野球や女性選手が受け入れられてきたことの表れだと言えよう。

第6節 まとめ：「女らしさ」の表現の希薄化とジェンダー・バイアスの越境

ここまで、1970年代、2000年前後、2020年前後のマンガ作品を分析してきた。1970年代連載の『野球狂の詩』シリーズでは、「女らしさ」や理想の女性像、男性とのパワー・スピードの差などが顕著に描かれ、女性のか弱さが強調されていた。また、「野球は男のスポーツで、女性はやるべきでない」というような表現も多く表れており、男性からの性的対象としてさらされる場面もあった。現実世界でも女子選手がプロ野球で正式に認められた後である、2000年前後に連載された『野球狂の詩 平成編』、『新・野球狂の詩』については、女性選手が特異な存在であることに大きな変化は見られなかった。男性の支えが必要であるなど、女性の力は男性に及ばず不十分であるとするような場面もあった。

『松井さんはスーパー・ルーキー』において、彼女が越えるべき障壁は、女性であるが故のものではなく、過去に囚われない自己の成長であった。松井さんは女性であることから男性選手から見くびられるが、男性を上回るほどの実力を示していた点は『野球狂の詩』と異なる。明示的に女性が男性に勝つ描写がある点は、女性作家の特徴と考えられることも示した。

『球詠』においては、もはや男女差による障壁は存在していない。選手自身だけでなく、登場人物全員がジェンダー意識を持っていない点は、女子野球の物語において稀有である。短いユニホームであるために強調される、女性選手の鍛えられた体は、「か弱い」「繊細」といった「女らしさ」に囚われていない。女性の心理に迫った投球シーンの描かれ方は、野球において女性が認められていることの表れであると考えられる。

どの年代も変わらず、「野球＝男性」が前提となっている物語が多く、物語世界の内外でジェンダー意識が存在する。しかし、時代が進むにつれ、登場する女子選手は、男性の理想とするような女性ではなく、男性と同様に野

球に取り組む一人の選手として、「女らしさ」に囚われない女子選手像が描き出されるようになってきた。また、男性選手と対等に勝負することや勝つことを目指すよりも、過去の自分や苦い経験を乗り越えるという、野球を通じた成長に主眼が置かれるようになってきていることで、「女性」選手であることの特異さは緩和される。女性が男性に勝つことを明示する傾向にある女性作家が、男性向けマンガを描くことが増えていることや、『球詠』の投球シーンに表れる、女性の心理に迫った表現技法は、野球マンガにおいて、女性が受け入れられてきていることの表れであろう。

終章

本論文では、第2章で女子野球にまつわる新聞記事、第3章で女子野球及び女子選手が登場するマンガ作品を分析・考察してきた。

新聞記事の分析からは、各時代の大衆が、どのように女子野球を捉えてきたかを示した。女子野球はかつて興行的に行われており、見世物としてのイメージが強く、批判されることが多かった。しかし、徐々に野球をする女性が増加してくると、男性との技術的・身体的な差を認めつつ、ジェンダー差や女性にとって不利な環境にも屈することなく、懸命に野球をする女性選手が注目されはじめた。女性選手の頑張る姿や野球に取り組む姿勢によって、応援されるようになってきている。裏を返して言えば、野球のジェンダー・バイアス、男性優位的な視点は今日でも堅持されているとも考えられる。

マンガ作品の分析からは、女子野球や女性選手のイメージ・表象を考察した。たしかに、野球は「男のスポーツ」であるという前提はいまだに根強く残っている。しかし、男性選手と対等に勝負し勝つことを目指すよりも、野球を通じた自己の成長に主眼が置かれるようになってきている。近年は、物語内においてジェンダー・バイアスやジェンダー差に囚われている女性選手は少なく、女性が男性に勝つ描写や女性の心理に迫る表現技法によって、マンガにおいても女子野球が認められてきていることが読み取れた。

以上の2つの分析を通して、近年、女子野球の広がりが徐々に見られながらも、「野球は男のスポーツ」というイメージが薄れてきたわけではないこ

とがわかった。女子野球が語られる際には、男性と比較されることが多い。しかし、ジェンダー・バイアスに屈しない、一生懸命な女性選手の姿が少しずつ認知されるようになってきたことが大きな一因となって、女子野球は広く認められ、発展してきた。新聞における女子野球選手を取り上げた人間ドラマ的な記事や、マンガにおける女性に迫った描写、女性選手の心理を読者に想像させる表現は、一選手としての姿を提示しており、女子野球が批判対象ではなく応援されるべき対象である認識を周知させていると言えよう。

女性が野球をする環境が整い、競技人口が増加するだけでは、ジェンダー平等は達成されたとは言えない。女子野球が、理想の女性像や「女らしさ」、男性との差異を前提としない評価・魅力を得られてこそ、野球のジェンダー・バイアスを越境できる。そのためには、新聞やマンガをはじめとする、メディア表象が重要な鍵を握る。『球詠』のような作品は、その一歩となりえるかもしれない。

参考文献

- 飯田貴子・井谷恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年。
- 伊藤公雄「変容する現代スポーツと男性性」『スポーツ社会学研究』27(2)、2019、pp.5-15。
- 伊藤守編『よくわかるメディア・スタディーズ [第2版]』ミネルヴァ書房、2015年。
- 井上俊・菊幸一編『よくわかるスポーツ文化論 [改訂版]』ミネルヴァ書房、2020年。
- 一般社団法人日本野球機構ホームページ「統計データ」、<https://npb.jp/statistics/>（最終閲覧日：2024年1月11日）
- 岡田康太・東川安雄「プロ野球における観戦動機に関する研究：広島東洋カープファンを事例として」『運動とスポーツの科学』22(1)、2016、pp.75-80。
- 佐野慎輔「スポーツとは何か」笹川スポーツ財団、<https://www.ssfor.jp/knowledge/history/sports/01.html>（最終閲覧日：2023年11月5日）、2018年。
- 菅原禮編『スポーツ社会学への招待』不味堂出版、1990年。
- スタウロウスキー、エレン・J編（井上則子・山田ゆかり監訳）『女性・スポーツ大事典：子どもから大人まで課題解決に役立つ』西村書店、2013年。
- スポーツ庁「スポーツ庁が考える「スポーツとは？ Deportare の意味すること」DEPORTARE、<https://sports.go.jp/special/policy/meaning-of-sport-and-deportare.html> 2018年配信（最終閲覧日：2023年11月5日）。

全日本女子軟式野球連盟ホームページ「日本女子野球の歩み」、https://zenjoren.jp/?page_id=220（最終閲覧日：2024年1月10日）

全日本女子野球連盟ホームページ「競技人口推移に関する資料(2022年度版)」、<https://wbj.jp/archive/allsorts>（最終閲覧日：2023年11月7日）。

高嶋航「女子野球の歴史を再考する：極東・YMCA・ジェンダー」『京都大學文學部研究紀要』58、2019、pp.165-207.

谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』青弓社、2007年。

夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか：その表現と文法』日本放送出版協会、1997年。

パトラー、ジュディス（竹村和子訳）『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社、1999年。

ハム、マギー（木本喜美子・高橋準監訳）『フェミニズム理論辞典』明石書店、1999年。

樋口耕一「現代における全国紙の内容分析の有効性：社会意識の探索はどこまで可能か」『行動計量学』38（1）、2011、pp.1-12.

宮沢千春「スポーツマンガに潜むジェンダー・バイアス－女性選手を登場人物とする野球マンガの分析を通じて」『コミュニティ = Community』7、2004、pp.129-149.

八木久仁子「昭和の女子野球：その興亡の要因」『人間健康研究科論集』1、2018、pp.29-49.

山口＝内田雅克「ジェンダー史研究：第二次世界大戦後の「野球」と日本人男性の「男性性」」『東北芸術工科大学紀要』22、2015年。

山口理恵子「スポーツ・ジェンダー研究の「まなざし」について」『スポーツ社会学研究』18（2）、2010、pp.39-52.

來田享子「スポーツ・ジェンダー学の展望：研究成果を社会に活かす」『スポーツとジェンダー研究』20、2022、pp.47-49.